

## 野甫小中学校の「存続」について伺う ／ 津田隆

■ 2 番 津田隆議員 野甫小中校の存続について伺いたと思います。野甫区の小中、存続については、存続を希望する声が多く、過去に教育委員会で実施された区民アンケートも存続との結果が出ています。その後、教育委員会では学校存続の取り組みを成功させていける離島地域への視察などを行なっています。そこで、学校存続を望む区民の声が私のもとにも寄せられており、野甫地区に足を運び、区民と意見交換を行ってきました。私が調べた限りでは、少子化が進んで地域で留学制度など導入し、学校存続した例は多々ありました。野甫小中校の存続については、教育委員会の今後の取り組みを伺いたと思います。

■議長（金城信光） 答弁、教育長。

■石川清一教育長 こんにちは。ただ今の、2 番議員の津田議員の質問に対し答弁いたします。三つの柱で答えたいと思います。一つ目に、野甫小中学校の存続とは何を意味するのか。

（津田議員、横に手を振る。）

これはよろしいですか。わかりました。

それから、「野甫小中学校の存続に向けて、野甫地域の皆さんと取り組むことになっていたはずだけでも、これまでに生徒が増えていない。働きかけは、どうしていたか」というようなことを答弁したいと思います。

現在、野甫小中学校には小学生が 0、中学生 1 名が在籍しています。小学校は令和 5 年度より休校措置をとっています。次年度、令和 7 年度、中学生 1 名の見込みですが、教育委員会では、本人の希望と保護者、学校関係者の意見を尊重し、存続の方向で進めていく予定でいます。

過去の議会、一般質問を紐解いてちょっと調べてみますと、令和 4 年の 3 月の第 3 回定例議会におきまして、7 番議員の野甫議員からの質問に対して、当時の課長の回答に、野甫島留学センターの整備に関しては、昨年 7 月から 8 月にかけて野甫区民及び野甫小中学校児童生徒を対象に、野甫小中学校の存続を望むか否かのアンケートを実施したところ、学校存続を望む意見が区民、児童生徒の多数を占めたことから、その結果に基づき同じ年、同年の 10 月の臨時庁議において、その民意を汲み取り村の方針として野甫小中学校の存続に向けた実施方策として計画、検討されているというふうにありました。あとは略します。と、回答されていました。当時の生徒数から鑑みまして、伊平屋中学校との学校統合が考えられます。

よって、地域の声、学校児童生徒の声をアンケート形式で実施し、それを民意として学校存続とした取り組み、そして行政から地域の声に傾聴した、しっかり耳を傾けてこの回答が出ての、現在の野甫小中学校の存続だと思われま。

周知のとおり、世界的に新型コロナウイルス感染症が蔓延<sup>まんえん</sup>し、日本で最初に新型コロナ患者が報告されたのは 2020 年 1 月、令和 2 年です。その後からというもの、日本国内の学校におきまして卒業式や入学式、PTA 活動などなど、地域においても多くの行事が中止に追い込まれております。本村でも罹患者が多発するなどの影響を受けまして、人々の接触というのがタブーになってきたかと思われま。

よって、その頃に地域と膝を交えての懇談というかたちは到底無理だったと思わ

れます。コロナ禍も緩和されてきた令和4年度より、また先進地の調査、研修を実施し、令和5年6月に先進地視察に参加したメンバー及び野甫区長を<sup>しょうへい</sup>招聘し、意見交換なども行っております。ほとんどの委員が留学制度のハードルが高く、厳しい状況ではあると理解していますが、存続を希望するものでした。

経過実施においては、地域住民の理解と協力及び施設の充実と、特色ある教育プログラムが必要であり、本村の実情に適した持続可能な仕組みを構築できればと考えております。

それから、「存続に向けて生徒を増やす努力はしてきたのか、今後に向けての企画などは考えてるか」というような視点に目を向けますと、先ほどの回答とも重複しますがけれども、これまでの島留学制度、山村留学制度計画を進める目的で先進地の事例や取り組みなどの視察も行っております。ご承知のように、野甫区における学校存続問題は、教育委員会だけで解決できるものではありません。今後は、伊平屋村すべての公立学校を含め議論する必要がある、今年度、令和6年の8月に設置しました伊平屋村立学校統廃合検討委員会におきまして、本村の学校のあり方、方向性を検討し、地域の理解と協力が得られるよう推進してまいります。

なお、この検討委員会の設置が、そのまま統廃合決定を意味するものではありません。議員の皆さんにおかれまして、それぞれの考え、ビジョンなどをお持ちだと思います。お知恵をお貸しいただければ幸いです。それがまた合意形成にもつながるものだと思います。

補足ですけれども、今年度、この学校統廃合関係についてということで、野甫区民の住民説明会ということをして8月8日の木曜日に7時から地域公民館である野甫公民館で開催いたしました。今年度から赴任をしました私、それから同じく新垣教育課長、それからこれまでの伊礼前教育課長、課長補佐等が、行政から出向きました。そして野甫区民20名ということで、いろいろそこで議論をしながら、野甫区民の意見、考えなども多くいただきました。そういうことを持ち寄って、予定では11月に学校統廃合の検討委員会が行われます。

伊平屋村立野甫小中学校ですから、これから伊平屋村全体の問題として九月、十月にアンケートを実施し、集計して10月には回答できる予定でおります。ということで、回答いたします。よろしくお願いいたします。

■議長（金城信光） 津田議員。

■2番 津田隆議員 僕は存続ということで、それだけ聞けばいいんですけども、いろいろこれから先の統廃合の話だとか、これについては容認できません。僕が野甫に行って聞いたかぎりには、皆さんが望んでいることは、存続なんです。全部聞いたわけじゃないから、また、いろいろ聞くんですけども、野甫区民のアンケート結果も出て、行政も存続の方向で検討を重ねると、存続が実現した地域の学校の視察も行っているわけですよ。で、存続の取り組みがまだ道半ばなんですよ。道半ばで、野甫の区民の皆さん、説明いっぱいしたと言うんだけど、それは僕は、わからないんですけども、道半ばだから、存続について検討していったほうがいいと思うんですよ。

僕が聞いたかぎりには、ほとんどの人が「いつ統合の話が出たの。」というふうに話してました。だからこの前の議会でも、僕は「いきなり統合は、ないんじゃないか。」

と言いました。学校存続を希望するというのが、野甫区民の気持ちなんです。だと、僕は捉えています。だからもっともっと、区民の皆さんと議論して、存続という言葉を変えるんだったら、それなりにやっぱり足を運んで納得するまで議論したほうがいいと思っています。

やっぱりこの長いあいだに野甫区はずっと人が少なくて、もちろん区民と学校とでコミュニティができあがった学校ですから、地域の皆さんにすれば、ものすごく大事なところだと思うんです。

第5次伊平屋村総合計画の中でも、「島の未来は教育がつくる」と、いろいろ謳<sup>うた</sup>っていますよ。「共創・協働のむらづくり」とか、いろいろ書かれています。「誰一人取り残さない」とも書かれていますよ。その中で、今言う、統廃合とかそういう言葉が出てくるっていうのは、僕は今のところは容認できない。もうちょっと足を運んで僕も聞いてみます。僕は存続についてのみだけ、今日は聞きたかったわけです。

それで、もう一つあるんですけども、できたら野甫区民の皆さんともっともっと議論重ねていくことをお願いします。これに関連して学校を存続するに当たっては、いろいろと経済的な面とかもあると思うんで、野甫中学校の存続に関連しますが、野甫区の少子高齢化に対処するためには、経済の発展と区民が安定して生活できる定住政策を実施することが重要と考えています。一例上げれば野甫区で起業する方々への支援策や、移住定住策としてリモートワーカーに対する周知策など考えておられるかどうか、企画財政課の課長に、そういうことが並行して可能なのか。

お願いできますか。

■議長（金城信光） 休憩いたします。

再開いたします。教育課長、どうぞ。

■新垣恵教育課長 津田議員の質問に対して答弁いたします。先ほど教育長からも説明があったんですけども、野甫区の存続に向けていろいろな視察を行ってきました。その中で振り返りの話し合いとか、そういったものを何度か野甫区で行われているんですけども、やはりいろいろな留学制度を実施する計画実施については、地域住民の理解と協力、あと施設の充実というのが一番に上げられて、かなりハードルが高いなという認識を皆さん共通してお持ちでした。

地域の住民の理解と協力が必要なんですけども、野甫小中学校の存続については何度も答弁し、いろいろ議論されているんですが、地域の活力の維持と向上を目指すためのものでありまして、これまでの取り組みについても、目的ではなく手段であるっていうことで、今後も本村の実情に適した持続可能な仕組みを構築できればと考えているところです。以上、説明を終わります。

■議長（金城信光） 津田議員。

■2番 津田隆議員 もちろん今おっしゃったことはもっともで、ずっと昔から生徒が少なくなっていくっていうのは、わかっていたし、取り組みとしてもどうかなと。やっぱり地域が、別に学校が1名になったから廃校とか、そういう規定はまだないんで、少ないからどういう学校にしようとか、どうやったらいい学校にできるかなとか、それが存続の意味だと思うんですよ。だからその存続に対しての議論等とかいうのが、なかなか聞こえてこない、見えてこない。その長いやりとりの中

で、今言うように方向性を見つけて、そして生徒募集したんだけど、このやり方についてはインターネットとか見ると千差万別にあって、成功した例もいっぱいあるし、学校を無くした例もたくさんあるし、そういった意味ではネット社会は多少勉強になるんですけども、やっぱりそれを見ると、その存続について、まだそこまで対策を講じてない。確かに学校は見てきました。先進地として参考になる学校を見てきて、すぐそこで会合あったのかなとか、じゃあどういう方向性を示そうとか、1時間も2時間もあれば結構良い例を見たり聞いたりできるんですけども、どうしていかってというのは確かに難しいと思います。皆さんで議論、一番重ねていかなければいけない議論はそこだと思います。そこをどんどんやって、もうなすすべがないとお互いに納得したなら、統合を考えざるを得ないのかなと理解できます。やっぱり地域の皆さんが存続を望んでいるのであれば、議会は民間から付託されているわけですから、そこに向けて一緒になって考えてあげるのが議会だと思います。もちろん議論する場でもあるし。どう理解していくかが一番問題なんですよね。その理解していくためには、もっともっといろんな企画を立てたり、計画立てたり、議論して、地域の皆さんが納得できるかたちが一番ベストかなと思ったから、存続しながら、並行して経済とかがあったりして、少なくなったと思うんだけど、国の政策で予算ができそうなものも結構あったし、そういうのを含めると、やってできないことはないかなと思っています。

だから、まだその統合、廃合という、どっちにしても廃校ですから。言葉的な統合、廃合って言ってもね。その言葉は容認できないと言った理由はそれです。だからもうちょっと存続に向けて、一緒に議論してほしいなと。だからその意味で経済対策とか並行してできないのかなと。先進地視察はしても、経済の面では地域の皆さんと話した経緯がなさそうだったから、経済対策と並行してなんとかできないのかなと考えていて、経済課長に聞こうと思ったわけです。そういう意味で、経済課長にちょっと聞きたいかなと思ったんです。

■議長（金城信光） 参考になんかあれば。村長。

■名嘉律夫村長 津田議員の質問にお答えする前に、野甫小中学校の統廃合の問題もそうなんですけど、伊平屋小学校も伊平屋中学校も、本当にいずれはそういう時が来るのかなと思うぐらい人口減少が激しいと。これは伊平屋だけの問題じゃないんですね。全国的に大きな問題なんです。やっぱり学校がなくなると、地域のコミュニケーションが無くなるというのが一つの大きな問題でして、津田議員が質問している、「じゃあ、今後どうしたらいいか」という問題については、島の人口が増えないと解決できません。ただ増えるだけではなくて、そこに子どもが生まれなかったら、もちろん学校の存続というのは非常に難しいと思うんですね。

ですから、今後、野甫島については、どうすれば人口が増えていくのか、この伊平屋本島もそうなんですけど、ですから企業を誘致できるかどうか、そこにやはり、例えばの話、リゾートですとか、そういうのができるのであれば、そこに自ずと人は増えてくるわけなんですけども、おそらく、これからそういうことを議論することが多くなってくると思います。ですから委員会にこの話を投げかけても、おそらく委員会ではこの答弁をすることは非常に難しいと思うんですよ。ですから議員も、「じゃあ、島の人口をどうしたら増やせるかな」ということを、企業の誘致をどうしたほうがいいのかとか、空港建設でもそうなんですけど、空港ができれば、どう

人口が増えるのか減るのか、観光客がどう増えていくのか、そういうことも含めて議論する必要があるのかなと私は思うんですけどね。

ただ、今いきなり振られても、なかなか行政は答弁するのが非常に難しいと思いますけども、ですから、どうしたら島に企業がくるか、そして人口がどう増えていくかっていうことをですね、やっぱり分析しながらやっていったほうが、非常にこの話は解決に向けて近道なのかなと私は思うんですけど。

いずれにしても今、津田議員がおっしゃっている、非常に死活問題でありまして、あと一人で学校、生徒がいなくなると。小学校も単式から複式になろうというところなんですね。本当に野甫だけじゃなくて、伊平屋小学校も中学校もこの問題は大きな問題となっています。

で、我々がこれからやるべきことは、いかにして島の人口を増やすかということなんですね。企業の誘致ですね、そういうことを含めて考えていったほうがいいのかなと思いますので、どうか議員もそういう知恵がありましたら、「こういう方法もあるんじゃないか」ということを、やっぱりこれから、行政と議会でも話す必要があると思うんです。これから未来に向けてそういう話をしていったほうがいいのかなと思いますので、どうか、あまりこのことについて委員会に言ってもなかなか解決できませんので、お互いがこれからどうしていったら良くなるかということ、野甫区民を含めて議論していったほうがいいと思いますので、どうぞよろしくお願いします。以上です。

■議長（金城信光） 津田議員。

■2番 津田隆議員 村長のそういうのも理解できてます。だからさっきも企画財政課に失礼ながら話を振ったのもその心の表れだと思うんですけども、確かに伊平屋中学校も伊平屋小学校も複式という面にさらされてくると思うんですよ。でも野甫小中を閉めたからっていつてこっちが増えるわけでもないんですよ。その存続に向かっていく力が、いろんな方向に向かっていくんじゃないのかなと。今言った、人口を増やす、どうやって増やすのかっていうのをどんどん考えられるわけですよ。「はい、こうだからはい、閉めましょう」というのは、それはもうつながっていかないわけですよ。統廃合は、もうどうしようもないとなった時で、僕はいいと思うんですよ。今のことを考えても。

野甫の学校を閉めたから、伊平屋中学校が変わるかっていったら変わらないですよ。同じです。人を増やさなかぎり。人を増やすにはどうしたらいいかっていうのを、一生懸命、今、村長もおっしゃったけども、政治、国も、人口を増やそうと一

生懸命ですよ。外国人入れるかとか、いろいろ、子ども政策とか。<sup>あきら</sup>諦めるのはまだ早いんじゃないかなと。野甫の区民の皆さんが存続を希望しているかぎり、じゃあ、どうしたほうがいいのかってやって、いずれはどうしようもできないという場面がきたら、それはそれで、そこから本来は統廃合に入るべきだったんじゃないのかなと、そう考えています。

すぐこうだから、こうというのは、観光でもそうだし、なんでもそうだけど、問題が起きて、こうなって人がいなくなったから、はい、やりましょうってなってしまいうんですよ。

だから、やっぱりその続けていく、存続するといったん決めたから、以前、アン

ケートもとって進んでいるわけです。進んでいるところで何校か先進地視察に行つて、こうだったから難しいでは、誰でも納得できないです。やっぱり存続ありきで考えて、いつか和解できると思いますよ。どうしたら存続につながれるかって一生懸命考えて、それでも無理だと思った時には認めてくれると思いますよ。それを野甫区民の皆さんと一緒に、地域が理解することを願って質問を終わります。